

記念鼎談?『東洋大学における社会福祉学教育・研究の歴史的意義と展望』

雑誌名	東洋大学社会福祉研究
号	8
ページ	11-26
発行年	2015-08-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008065/



●東洋大学社会福祉学会 第10回大会／2014年8月

【記念鼎談Ⅰ】

『東洋大学における社会福祉学教育・研究の歴史的意義と展望』

登壇者：古川孝順、天野マキ（本学名誉教授）、佐藤豊道（本学社会学部教授）

司会者：森田明美（本学社会学部教授・学部長、福祉社会開発研究センター長）

進行係：それでは時間になりましたので、東洋大学社会福祉学会設立10周年記念の記念鼎談Ⅰを開始させていただきますと思います。鼎談のタイトルは『東洋大学における社会福祉学教育・研究の歴史的意義と展望』というタイトルで、司会は森田先生にお願いしますので、これから先の司会は森田先生に進めていただきたいと思います。よろしくお願いします。

森田：皆さん、こんにちは。

今、社会学部社会福祉学科に所属しております、森田と佐藤先生と、こんな2人で、大先輩を前にして、これから1時間20分の時間が与えられておりまして、いつもこういうふうなメンバーだと一番私が若いんですよね。最近でも、大学のうちの社会福祉学科の学科会議やると、もう結構上のほうになってきまして。私も東洋大学、今年で21年目になりました。随分長く居ることになったなというふうに思っておりますけれども、ちょうど昨年から私が今、社会学部長をしておりまして、古川先生が心配だなんて顔をして、いつもなんか言いたそうなんですけど。きょうは私はこの3先生ができるだけ話しやすく持っていくというのが私の役割ですので、ここでずっと顔ぶれ見ると、みんな3人の先生方の教えを受けた方たちがたくさんいらっしゃると思いますので、一言でも多分先生方のお話を聞きたいなと思ってらっしゃると思いますので、冒頭、私のほうからこの3人の先生っていうのはどういうつながりの、どういうふうにつながり、間柄が、東洋大学の教育の歴史と、それから研究というものを作ってくださったのかということ、を、ちょっと簡単にご紹介をさせていただいて、きょうの私の役割を進めさせていただ

こうと思っております。

先生方のプロフィールにつきましては16ページ、17ページ、18ページにあります。その先生方の全体像っていうのが、社会学部の歴史という形で23ページに東洋大学における社会福祉教育と研究の主な歴史という形でA4の1枚の年表に作られています。そこをご覧になりながら、先生方のこれまでの業績などについてはよくご存じだと思いますので、そこをご覧になりながら今日のお話全体を切り出せればと思います。

どんな時代背景の中で先生方が東洋大学・社会学部社会福祉学科の教育に当たっておられるかっていうのは、簡単に私のほうでご説明させていただきます。

まず最初にお話になるのは天野先生にお願いしようと思っています。天野先生は1982年から東洋大学の社会福祉学専攻の時代に着任されまして、2009年まで東洋大学で教鞭を執ってくださっていました。

それからちょうど92年に東洋大学の社会福祉学科が出来上がるんですが、実は91年に古川先生と佐藤先生が着任されているんですね。で、ここにはちょっと幾つかの歴史的な課題があって、本来は社会福祉学科が学科として成立するときに着任をされるわけなんですけれども、いろんな理由でこの学科の創設が遅れまして、で、着任は91年。それで92年から東洋大学の社会福祉学科というのができるという歴史になります。

で、古川先生は2012年までこの東洋大学で教鞭を執られていますが、古川先生はもう本当にいろんなものをお作りになるのが好きで。ですよ？

あるいはもう若くて、いつもいつも次のことを考えていらっしゃるというのか、この東洋大学の

社会福祉学科に着任された後も、私は94年に着任をするんですけれども、その後に二部の社会福祉学科を作る。その後に大学院の福祉社会システム専攻を作る。その後にライフデザイン学部をお作りになるし、その後に今の大学院である福祉社会デザイン研究科というのをお作りになるということで、とにかくいつも新しい社会福祉学教育と、それから研究というものを作るということで活動をしてくださっていたという先生です。

この天野先生と佐藤先生は東洋大学の卒業生でいらっしゃるわけで、で、私も実は大学院の修了生ですので、そういう意味ではこの古川先生が恐らくどんどん作っていく所に3人、先生方は相談を受けられて、そして多分新しい東洋大学の教育であるとか研究のあり方あるとかっていうのを、東洋大学らしさっていうのをその中に盛り込んだ形で関与されていたんだろうというふうに、私自身としては思っております。

今日のこの3人の先生方との話し合いというのは、私もとても楽しみにしております、この80分の間に、ちょうど今日は学内学会ですので、私は一つ、ぜひ明らかにしたいことがあるんですね。それは東洋大学らしさ、東洋大学における社会福祉研究や社会福祉学教育の在り方っていうのは一体何なんだろうっていうことを、私はこの80分間の間に明らかにしたいというふうに思っております。

先ほど私はちゃんと、それなりに構成を考えておりますが、全て駄目って言われまして、もっと自由に語らせてくださいというふうに言われました。多分そうだろうとは思っておりましたけれども、そういうふうに言われまして、この時間内に何とか収めるのが私の役割ですので、あまりこれ以上は申し上げないで、先生方には15分間は話していいです、というふうに言いました。それ以上のことは話してませんので、順番は、天野先生、佐藤先生に話していただいて、それで具体的に古川先生のところに3番目に話していただく。こんなふうにして話を進めたいというふうに思っています。幾つか私はキーワードをお願いしたんですが、それが入るか入らないかは分かりませんが、順々にお話をさせていただこうと思っております。

ます。

今日はこれが終わった後に懇親会も予定されておりますので、あまり難しい話というよりは多分ここでしか聞けないような話、そしてそれぞれの方々が先生方の言葉の中から自分の学生時代、あるいは自分の教員の体験の中で先生方との接触があった時代っていうことを思い出していただきながら、明日からの研究や教育に活かしていただければというふうに思っております。どうぞよろしくお願い致します。それではまず最初に天野先生からお願いしたいと思います。

天野：こんにちは。しばらくでございます。天野と申します。お目にかかった方、そうではない方、いろいろおられると思いますけれども、最近お入りになった方は全然存じ上げておりません。よろしくお願い致します。今日、最初に古川先生が窪田先生について、すごく含蓄あるお話をしてくだしました。私も窪田先生とずっと一緒に働いた経験がございます。お亡くなりになりましたので、それでご葬儀にも参加できませんでしたので、先生を偲ぶ何かをしなければと考えておりました。今日はこういう機会を得られてとてもありがたいと思います。本当に、ご冥福をお祈りしたいと思います。

〔窪田暁子先生を偲ぶ〕

古川先生は理論的なことで、ご丁寧な窪田先生のお仕事といいますか、業績について紹介されました。私は近くにおりまして、研究者である窪田先生というよりも、個人的な女性として、大先輩としてお付き合いして頂いた記憶がございます。

とても残念なのは、数年前に名古屋で行われた学会の折、ご飯食べに行きましょうとお話し、2、3回、そのようなチャンスがあったのですが、結局行かないまま終わってしまいました。心残りになっております。先生は、玄人はだしのお料理を作られます。何度か、美味しいお料理をご馳走になったことがございます。美味しいお料理を召し上がる先生の笑顔がなつかしいです。かえすがえすも、最後に、ご一緒できなかったことが悔やまれます。せめてご冥福をお祈りしたいと思います。

先生は、個人的にはとても優しいところと、厳しいところがありました。たった15分で、お話ができるか分かりませんが、窪田先生という、とてもすてきな研究者を、東洋大にお迎えでき、私たちは、同僚として、先輩として一緒に過ごさせて頂いたことを、誇りに思います。グループワークという領域については、それはもう素晴らしいリーダーだったと思います。ただ、幾つかあったということもございました。厳しかったですね。一緒にアメリカで行われました国際会議に出かけました。そのときは、立教大学の庄司先生、明治学院大学の山崎先生と、私の4人グループでした。学会終了後、フィラデルフィア州に面白い児童養護施設があるというので、レンタカーを借りて、施設を訪問しました。施設近くのモーター泊って、2日か3日、その施設に通った記憶がございます。その間には、レストランで食事をする機会もございました。ある日、レストランに入りました。アメリカのレストランでは、一人分が、二人分位、量的には多く、一人分を二人でシェアするのは、当たり前だと思われておりました。そこで、海外体験の多い先生方のどなたかが、料理は、一つか二つオーダーして、みんなで、シェアしましょうと提案されました。

そのとき、窪田先生から、お行儀が悪いと、厳しいお声がとんできました。みんな、納得ゆかない顔をされておりましたが、その日は、一人ずつ、オーダーいたしました。窪田先生には、そういう不思議なところもありました。ただ、後ほど、先生が、終戦直後、マッカーサーの命の元に、留学生として、日本を背負ってアメリカに留学された方だったことに、みんなで、思い至りました。先生が留学された頃、日本は、占領政策の下にありしたから、留学生たちは、日本人の誇りをもち、上品で、しっかりした日本人というイメージを、アメリカの人々に、知ってほしいことも含め、すごい責任感を持って、アメリカでの留学生生活をされていたのだと思い知らされました。その厳しさが、大変なものであったということ、そのときに、しっかり感じた次第です。その後も、アウトレットなんかに行って、沢山の買い物をして、ホテルに入り、ボーイさんの運ぶカートに、はみ出すほ

どの荷物を積んで、ロービーを行進しているとき、先生は、一緒に歩かれませんでした。私たち3人が、荷物で一杯のカート押しているとき、先生は、私たちを見知らぬ人のように、全く、仲間では、ありませんというように、離れて歩き、さっさと、お部屋に入ってしまったわれました。本当によき世代のレディーなのだと感じたことでした。ただ、部屋に戻った私たちに、先生は、ルームサービスの時間に間に合うように、私が先に戻り、オーダーをしておきましたと、言われました。実際、お陰様で、私たちは、その夜、辛うじて、遅い、夕食にありつくことができました。今となっては、真相は、わかりません。

やはり、先生は、先の見通しの利く、後輩思いの、やさしい研究者だったのだと、追想する次第です。そういうことで、窪田先生には、いろいろ教わりました。ありがとうございました。

〔社会福祉を学び、貧困問題を研究するに至るきっかけ〕

ところで、私は、本日、ここでは、最高齢者になります。

東洋大学との関わりも、最も、古いかもしれません。本日の私の役割は、そのことと、関係するのではないかと、承知しております。私と東洋大学との関係は、私が、本学2部社会学部に編入学したことに始まります。私は日本赤十字女子短期大学を卒業後、東京大学医学部附属助産婦学校に進学し、看護師と、助産師の資格を取りました。その後に、東洋大学に入りました。理由は、今でいう山谷と並ぶ高橋のドヤ街に関係があります。助産婦学校における保健所実習で、たまたま、配属されたのが江東区深川地区に設置されていた保健所でした。江東区を管轄する当該保健所は、高橋3丁目一帯に広がる日雇い労働者の居住地区、通称高橋ドヤ街を管轄しておりました。保健所の仕事の一環として、保健師さんたちは、ドヤ街居住者の疾病予防とその伝染の縮小のため、予防医学的地域活動を展開しておりました。特に、在宅治療中の結核患者の家族や地域住民への感染予防が、重要な課題になっておりました。2週間ほどの実習期間に、保健師さんと共に、何度か、ドヤ街の結核患者とその家族を訪問し、大きな感銘を

受けました。昭和35年だったと記憶しております。家庭訪問後、ドヤ街の路地を歩いておられますと、子どもたちが、路地で、丁か半かとやっておりました。学校に行っていない子どもたちが、こんなに存在することに、大きなショックをうけました。どうしたら、この子どもたちを学校に戻せるのかということが最初の課題でした。この時、私はドヤ街の中で仕事をすると決めました。その結果、看護婦とか助産婦資格だけではどうにもならないと考えたわけです。助産婦学校卒業後、東大病院に残り、働いておりましたので、職場から、一番近い東洋大学を選び、ドヤ街でボランティア活動を開始するための準備をすることに致しました。東洋大学には、たまたま塚本哲という先生がおられまして、その先生が日本赤十字短期大学でも、社会福祉の講義をしておられました。そのことを思い出し、塚本哲先生にご相談し、編入試験を受けることになりました。当時、看護大学は少なく、日赤の他には、聖路加があるだけでした。お陰様で、3年次への編入学がかないました。

塚本哲先生の話は、あらためて、どこかで、チャンス頂きたいですね。日本の社会福祉の歴史に残る人でもありますから。そういうことで、私と東洋大との関係が始まったということです。高橋ドヤ街での活動は、東洋大に編入学以前に、すでに、開始しておりましたので、入学後、瞬く間に、卒業論文への取り組みが始まりました。卒論の主査は、塚本哲先生でしたが、ドヤ街の貧困問題を卒論のテーマに選択することになったきっかけは、山下袈裟男先生だったのです。私は、当時、東大病院に在職し、官僚制の問題も、研究しておりました。この問題も、大変、興味深く、当時、東大の社会学部から非常勤で、授業をしておられた先生から、いろいろ、教えを受けておりました。迷っておりましたとき、山下先生は、一緒に、ドヤ街に行ってください、状況も確認して頂けました。そんなことで、日雇い労働者や不安定就労層の貧困問題は、私の生涯の研究テーマになったのです。

〔山下袈裟男先生のこと〕

山下袈裟男先生は、その後、東洋大学の、特に社会福祉学の大学院設置や社会福祉学科の設置等

に貢献されました。現在92歳になられ、現在は、民間の老人施設に入所中です。主訴は、脳梗塞で、左半身が少しご不自由ですが、頭はしっかりしておられて教え子の出版した著書に、朱筆を入れておられます。認知症はなく、意欲的にリハビリテーションに努めておられます。その生き方を拝見しながら、これが、東洋大学の一つの歴史かなと感じております。現在にいたるまで、なお、東洋大学に対するアイデンティティーが深く、教え子を大切に考えて、教え子の著書に朱筆を入れておられるというので、朱筆を頂いた人はびっくりしておりましたが。出版された本ですよ。名誉教授でおられますから、当然といえば当然かもしれませんが。92歳にして頑張っておられる先生に、元気を頂いております。その山下先生が、東洋大学の社会福祉学科と、大学院の発展に関わってこられたことに、改めて、感銘を受けております。学部については、社会福祉専攻から、社会福祉学科にするとき、本当に、山下先生は、努力をおしまれませんでした。私は、その下で、お手伝いをさせて頂きました。当時は図書館も、カード式で、図書基本台帳というものがありまして、そこに手書きの図書名が全部、記載されておりました。その中から何十万冊という社会福祉関係の図書を選んで、当時の文部省に提出しなければなりません。そのため、先ず、図書台帳を全部コピーしまして、福祉に関係する図書を切り取って、切り貼りしてコピーをとらなければなりません。そういう作業の結果、社会福祉学科が設置されたということです。これは、山下先生念願の社会福祉学科でした。

その過程で、古川先生と森田先生が赴任され、佐藤先生も、そのとき、赴任されたのでした。当時の山下先生は、本当にうれしそうでした。山下袈裟男先生を、ご紹介しました。先生の岳父になる方が田辺寿利先生です。山下袈裟男先生は、田辺寿利先生の教え子だったと伺っております。山下先生は社会学者から社会福祉学者に研究課題を変更されたのですが、最初の頃は、不本意であったと伺ったことがあります。ただ、随分前に、社会福祉学研究に進むことを決意されたように推察しております。私が、最初に師事した師匠は山下

袈裟男先生でした。ドヤ街の貧困研究をするということになったときから、それは、始まりました。卒論が終わったとき、山下先生に、大学院入学を勧められ、鈴木栄太郎先生を紹介されました。

〔鈴木栄太郎先生と修士論文のこと〕

鈴木栄太郎先生を、もし、ご存じないようでしたら、図書館で、鈴木栄太郎先生の著作集を参考にしてください。「農村社会学原理」、「都市社会学原理」というご著書を、先ず、お勧めします。私は、社会問題について考えるときに、最初に関わったのがドヤ街の日雇い労働者の生活問題でしたので、低賃金労働者の貧困問題を、常に、意識しておりました。もちろん、その解決の糸口といいますか、それをどういうふうに研究するかということに拘っておりました。ただ、鈴木栄太郎先生は、焦っている私に、何もおっしゃいません。毎週、大学院の授業のあと、心臓に病のある先生を、ご自宅まで、お送りし、その後、18時ごろから、22時頃まで、正座して、ずっと先生のお話を伺います。そんな時、先生は、私の修士論文の件については、何の示唆もされません。先生の社会学のお話や、最近の社会情勢等について、お話を伺っているうちに、やはり、先生のご著書を読むしかないと気づきました。それから、ひたすら、ご著書を読みまして、漸く、その原理を理解できるようになりました。それから、その原理を用いて、ドヤ街で調査を実施することにいたしました。それまでは、ひたすら、ドヤ居住者の相談を受け、戸籍の就籍の手伝い、期日のおくれた出生届けの提出、生活保護申請の手伝い、健康相談、沐浴の手伝い等を、ボランティア活動として実践していたのですが、ここきて、ようやく、理論的に、ドヤ街の構造を捉え、低賃金労働および労働者の生活構造を整理してみることになりました。ドヤ居住者と、話をするときは、いつも、その人の出生場所や、ドヤ街に住むに至った動機や、故郷の地域のことなどを、頭の中の調査票に刻み付けるよう努力いたしました。特に、調査票を持参して、記入して頂くことはありませんでしたが、調査票は、頭の中にあり、会話の中で、記入していったというわけです。

その後、社会学的考察みたいなことになるのですが、実践をしながら、現場を見ながら、鈴木栄

太郎理論の検証を進めてゆきました。

〔鈴木栄太郎先生と都市社会学原理〕

鈴木先生の「都市社会学原理」は、当時、私のバイブルでした。都市は、労働者である正常人口の正常生活が基本になって営まれ、その正常人口の基本的所属場所は、世帯か、学校か、職場であるというのが、基本的理念でした。資本制経済社会における労働者の社会構造的な分析として、単純明確な理論であります。また病人や、障害者等、世帯や、学校や、家族に所属しない異常人口の異常生活という理論的分析もあります。鈴木先生のもう一つの理論は、時間的秩序と空間的秩序という生活構造を分析する視点です。正常人口である労働者は、ウィークデイは、朝、仕事や学校にでかけ、夜は、世帯である家族と、共に過ごすというものであります。

時間的秩序は、一日、週、月、年、一生に及ぶものまであります。ニーリエの理論に、似ているところがあるなあと、私は考えております。ドヤ街の労働者は、朝早く、仕事場にでかけ、夜、家族の元に帰り、正常人口としての生活を営んでおりました。ただ、彼らの生活構造を時間的秩序という理論によって考察すると、多くの都市労働者が、月給制であるのに対し、ドヤ居住労働者の賃金は日給でありました。日給の時間的秩序は、多くの人々の暮す月給の社会の仕組みにあいません。高い家賃を支払いながら、劣悪な生活条件で生活せざるを得ない実態が、研究の過程で明確になってゆきました。今でも、この生活構造的な時間的秩序の違いによる生活困難については、間違っていないかと考えております。

また、あらためて、取り組みたいと願っております。

〔小山隆先生と社会調査〕

鈴木栄太郎先生がなくなられ、後には小山隆先生が赴任されました。次の師匠である小山先生も社会学者で、家族社会学の大家でした。小山先生も実践的に論理を組み立てられる方で、今でも忘れることの出来ないエピソードがあります。ある3月の寒い時期に、宮城県鳴子から、ずっと、山の奥に入った部落の調査を行いました。その当時は、理解できず、後で理解できたことですが、

小山先生は、核家族化という社会的現象が、日本では、どの時代から始まったのかということの検証のための調査を意図されていたのでした。核家族化が始まったという実証的データを検証するため、先ず、鬼首という温泉のある地域の戸籍係を訪問し、一戸一戸の農村家族の戸籍のデータを繋いでゆく作業を行いました。どこそこの人は、いつ東京に出たとか、戻ってきたとか、そんなデータをつなぎながら、農村から都市に出てゆき、核家族が増加してゆく農村の状況を確認できました。当時の核家族は、どのように増加して行ったかということが、実に、見事に理解でき感動しました。鬼首の役場での作業の後、戸籍係の原簿で出会った家族に、直接、面接するため、部落に入り、実際に、どうなっているかを確認する作業にはいりました。まだ寒い3月でしたので、夜は暗く、夜にならないと農家の人は戻ってきません。懐中電灯をたよりに、雪の中を転びながら村の小道を歩き、農家を訪問して、調査を行いました。そういう調査活動を二週間弱続けました。その過程で、核家族化という現象が、明治時代の日本の資本主義化と同時に進行していたというようなことが確認できました。小山先生は、ご著書の中に、そのようなことを明記されておりました。そういう経験と学習を重ねながら、同時に、理論的研究方法を学び、貧困問題の研究を続けて参りました。

〔経済学的社会政策論と社会学的社会政策論のこと〕

最近、社会政策学会に参加する度に、玉井金五先生の報告に興味を引かれております。

社会政策論の流れを、経済学的社会政策論と、社会学的社会政策論に分けて研究され、成果を報告されております。私はここ数年来、毎年それが面白くて、その発表を伺っております。特に、社会学的社会政策論に注目しております。この中には、東洋大学に関係ある多くの先生方がおられまして、小山隆先生の師匠である戸田貞三先生とか、社会学では鈴木栄太郎先生の師匠である、米田庄太郎先生とか、度々、出てきます。そのような諸先生方のお名前を聴かれたことがございますか。私にとっては、とても懐かしく、特に、米田庄太郎先生には、興味をひかれます。建部遯吾先生に

も、興味があります。米田先生は、鈴木栄太郎先生の師匠、建部先生は、鈴木先生の、喧嘩して別れた先の師匠だと伺っておりました。家族社会学は、人口問題との関係が深く、人口は、食糧問題他、多くの社会問題の基になっております。社会福祉や社会保障関係では、人口問題研究所が知られておりました。現在も、社会保障・人口問題研究所は存続しております。その前身である研究所は、社会学的社会政策として、人口問題政策に関わってきました。人口が増えれば食糧問題が起こること等と関係して、家族社会学の意義が大きかったのだと、改めて、感慨深いものがあります。

〔東洋大学社会事業科のこと〕

ところで、東洋大学に社会事業科が設置されたのは、大正10年でした。当時、東洋大学には、仏学科という学科がありました。その学科の中に、社会事業科が設置されたようです。その背景について、山下袈裟男先生のご著書から引用させていただきます。「仏教各宗の教義及びその歴史の研究を主とすると共に、一面においては感化救済に関する社会事業の科目を設け独り理論の研究を目的とするのみならず、また、実践活動の新方面を開拓せんことを期す。欧米における社会事業の研究設備の完備せることは己に識者の知るところ、然るに本邦未だ之に関する一大学をも有せざるは一大恨事なり、恐らくは本邦此の種の教育機関として唯一なり 本学の感化救済科をば更に一步進めて真の大学たらしむことはまた国家に対する光栄ある一事業たるべきことを確信す」。左記のような事情で、大正10年に社会事業科が、夜間で設置されたようです。

〔塚本哲先生のこと〕

先に、お話しました塚本哲先生は、その社会事業科の3回生でした。先の引用文にありました感化救済は、もっと前から、渡辺海旭先生も講義を行われていたようです。大正10年、社会事業科創設時の初代学科長は、富士川游という医学者でした。塚本哲先生も、そのお弟子さんの一人でした。

塚本哲先生は、昭和7年に施行された救護法実施のための職員公募に応募され、東京市の方面館に就職されたと伺っております。いまでいう、福祉事務所のソーシャルワーカーとして採用された

ということです。物凄い応募者の中から、採用試験に合格されたようです。昭和26年、社会福祉事業法制定の折には、東京市が、地域福祉のために創設した新宿生活館の館長として赴任されたと伺っております。その後、巣鴨の高岩寺住職の依頼を受けて、高岩寺ゆかりの「とけぬき地蔵」にちなんだ「とけぬき生活館」を開設されました。私たちは、学生時代、その「とけぬき生活館」で実習を行っておりました。とても家族的で、とけぬき地蔵にお参りするお年寄りの方たちの相談を受けるのが、ソーシャルワークの実習になっておりました。実習終了後は、塚本先生に、うな重をごちそうになって帰るというのが、たのしみでした。現在の社会福祉学科の最初は、そのように、専攻からスタートしました。

〔社会福祉専攻から社会福祉学科に至る過程〕

ところで、その社会福祉専攻は、大学院が設置されておりました。社会福祉学科ではなく、社会福祉専攻で社会福祉学研究科を設置していたということです。そのため、教員数は、社会福祉専攻のための数しか配置されず、大学院担当の教授が多く必要になると、学部担当が手薄になり、私が、東洋大に就任した当時は、学部の方が大変だった記憶があります。当時は、基本的に、6人、多いときで、7人でしたが、その中のお一人が、モゼス・バーグという外国人でしたので、役職等の担当ができず、運営は、大変でした。また、大学院担当の教授は、当然、偉い先生で高齢の先生が多くなりますので、当時、一番若かった私の雑用は、必然的に、多くならざるを得ませんでした。お陰様で、大変、鍛えられました。また、東洋大学は、イブニング・コースを夜間に設置しておりましたので、余計に、忙しかったと記憶しております。そのため、当時は、非常勤の先生方が沢山おられました。東洋大学出身の山下袈裟男先生は、中核的存在として、実務的な業務も多く、責任ある立場におられましたので、社会福祉専攻を社会福祉学科に昇格させるという願いは、だれよりも、大きかったと拝察しておりました。社会福祉学科が設置された折の先生のお喜びは、本当に感動的でありました。まだまだ、話し足りませんが、時間もきておりますので、終わりにしたいと思います。

〔おわりに〕

私は、学部、院生、相談助手の期間もを入れます、ほぼ、45年間、東洋大学に所属していたことになります。大学院博士課程を修了後、児童相談室という機関に非常勤相談助手という身分で就任しました。現在、この機関はありません。東洋大学は、児童相談室みたいな、他所では、手をつけない新しい試みを行っておりました。明治時代から、感化救済事業を実践し、大正時代には、感化救済の社会事業科を創設しました。女性については、女子大であった頃に、男女共学の大学を推進したということです。振り返ってみると、東洋大学は新しいことを実践してきたとの認識をあらたにすることが出来ます。その伝統をふまえて、新しいこと、今しかできないことを実践することが望まれるのではないのでしょうか。研究者として、そのことを、しっかり銘記し、研究に、実践に、励まれることを、若い研究者の方々に、お願いする次第です。ご清聴、ありがとうございました。時間を超過しましたことを、心より、お詫び申し上げます。

森田：先生、すいません。もう10分もオーバーしていますので。先生、また後でお話を聞きますので。

天野：はい、ありがとうございます。言いたいこと、言わせていただきました。ありがとうございます。

森田：ありがとうございました。ちょうど、確か再来年ぐらいが東洋大学が男女共学に、女子を大学に受け入れて125年かな。それぐらいになりそうですね。これもまた東洋大学でやらなければいけない一つのイベントなのかなっていうことを思っていますけれども。自由で、そして新しく実践というのを開拓していく、そういった教育や、あるいは研究というものが東洋大学の中の根幹になければならないというお話だったと思うんですが。佐藤先生、いかがでしょうか。

佐藤：はい、佐藤豊道と申します。よろしくお願ひします。18ページにプロフィールが載っております。私は二部の文学部の教育学科卒業です。そ

して、大学院で社会福祉へ進みました。

大学院のところでまず師事をしたのが田村健二先生です。そして今、天野先生からお話が出ましたモーゼス・バーグ先生。いずれも臨床系の教授でした。そういうところから臨床、特にこの時代はケースワークが主でしたので、それを学んだということです。

今は講義科目と研究指導は合併授業となっていますが、この当時の大学院の授業は講義科目と演習科目が分かれていました。科目が1コマあって、その後に演習が1コマあって。で、この科目で一応学問的なことを学び、そしてその後で、技術的な演習・臨床実習というのがありました。事例研究が中心でしたけども、それを学びました。従って、2コマ続きで、大変これは勉強になったなというふうに改めて思っています。

従って今の大学院のシステムは、科目と研究指導で合併になっていますけれども、これはやっぱり本来は分かれて行うのがよいのではないかと個人的には思います。それでまず大学院へ入ってびっくりしたのですが、田村健二先生は大変臨床経験豊富な方です。前身は国立精神衛生研究所の技官でした。そこで研究員をされていました。その前は家裁の調査官をされたりして、大変臨床に詳しい方でした。その先生から教わったこと、それは何かというと「本を読むな」ということです。「本を読んじゃ駄目だ」とね。

先ほど古川先生が「窪田先生を偲ぶ会」のところで話がありました。「窪田先生は論文の引用文献をあまりお書きにならない。それは、ちょっと困るんだよね」というようなことを申し上げました。ちゃんと書かれていれば、その後付けができるけれども、それが書かれていないということです。で、やっぱりちょっと違和感があるというわけです。

ところが臨床系の先生って大体そうだと思うのですけども、「真実はどこにあるのか」ということを考えたときに、人の言う言葉よりも自分の経験のほうが、これは真実だという、そういうゆるぎない自信を持っているのですね。これはモーゼス・バーグ先生も同じようなスタンスでしたけれども、モーゼス・バーグ先生のほうは専らフロイト理論

から始まる、正統派精神分析の流れをくんで、そして自分はその直弟子だったということを第1講に、最初の授業で系図を書いて、これが自分だと明示するわけです。だから自分から教わるあなたがたは直系なのだと。だからいかに貴重な存在かっていうことで、そのときにこの学問の権威づけというものを教わりました。

そしてこのマスターを修了していくのですが、大学院のドクターへ入るときに、この当時はまだ社会福祉学専攻の博士課程がありませんでした。従って先ほど、天野先生からもお話がありました、そうそうたる社会学研究科の、社会学の先生方がいる社会学研究科、社会学専攻の博士課程の中に入ったわけです。

そこで福祉研究するわけです。社会学の先生もそうせざるを得ない背景を分かっていますので、実際の指導は修士課程の社会福祉学専攻の先生にあてがわれるわけです。しかしながら、名目上は社会学の先生が主指導教授となるというようなことでした。従って主指導教授となるわけですから、論文指導の研究方法の力点が変わるわけです。「君、これ、先行研究の論文、少ないね、どれだけ読んだの?」と。それで先行研究を入れて書いた論文を副指導教授の田村先生に持って行くと、「なんでこんなに引用文献が多いの? 自分の言葉で語りなさい。」と指導を受けるわけです。主指導教授と副指導教授の指導法の間で、大変悩んだ経験がありました。

大変面白かったのはそのような経緯の中で、田村先生は自宅でも田村マリッジカウンセリングルームという実務の場を開いていました。それはまさに臨床の場なのです。ですから大学で講義を聴き、事例研究等の演習を学ぶ傍ら、先生の自宅で院生も実務にあたることができたわけです。もちろんスーパーバイザーもいるわけです。そのスーパーバイザーは田村先生の奥様で田村満喜枝先生という方で、この方も国立精神衛生研究所の出身なのですが、大変健二先生以上に臨床感覚に優れた人でした。その両先生からケースが終わるたびにスーパービジョンを受けて学びました。今思うと、大変懐かしい経験でした。

そこからは、「事例的手法の奥深さ」と「真実と

は何か」というのを学びました。そしてまた大学院では、社会学系の先生方から論文を書くときに、いかに説得力のある客観性の高い論文を書いていくことが大事だということも学んだわけです。

前後しますが、マスター在籍のときに、モーゼス・バーグ先生にも師事したわけですが、先生は精神分析、とくに、「統合的精神分析」の立場なのです。精神分析をマスターするには、座学ではいけないということを教わっていましたので、希望して精神医療の現場に行かせてもらいました。当時精神科病院のPSW（精神医学ソーシャルワーカー）の実習生として1年通っている間に、そこで「常勤にならないか」と声がかかって、常勤になってほぼ1年、精神科でワーカーをやりました。そこで学んだことが大変大きいです。やっぱり現場で学ぶということはすごいことがありますね。しかしそこで学んだ内容を論文にしようとするときにすごい乖離を感じます。これがなかなか難しいわけです。これを論文にするのは。経験や感性では分かるのですが、これを客観化し、論文として人に伝えられるようにするにはどうしたらよいのか。

ところが田村健二先生という方は、古い社会学部紀要や大学院紀要をご覧になれば分かりますけれども、ほぼ毎号に近いくらい、事例研究を載せています。これは並大抵の努力じゃないですね。それらの論文はやっぱり本質を突くものでした。

ですから田村健二先生は、徹頭徹尾、「事例が大事だ」「事例は生きた教科書だ」だという一貫した主張には説得力がありました。

私がこの東洋大学に入るに当たっては、山下先生から声がかかりました。田中寿先生の後任枠で入りました。入った年は古川先生と同じ1991年でした。社会学研究科の中に夜間大学院として福祉社会システム専攻が立ち上がって、そこでも社会福祉士の国家資格を出すということでした。私は大学院では主に窪田先生と「社会福祉現場実習」をお手伝いし、それから演習が欠かせないので「社会福祉援助技術演習」ということを持っていました。で、プロフィールにもありますように、1996年と1997年度はそのような形で、大学院では福祉社会システム専攻に関わってきたということです。そして1998年度から、今度は大学院の所属本籍を

社会福祉学専攻に変わりました、それから今日まで社会福祉学専攻所属という形になります。

学部で授業を持ったときに、1年次生に関しては29冊の本を読ませました。そしてそのときの1年次生は見事にそれをやり遂げたわけです。今思うと、あれどうしてできたのだろうと分からないのですが、当時の学生たちは質が高かったと思います。その中から大学院に進んだ方が複数名おり、大学等で教壇に立っています。また、博士号の学位を取得された方も複数名おります。そういった形で、「磨けば光る」じゃないですけども、やはり「機会を与えれば伸びる」ということを実感しています。

ところがそれでは、「今でもできるか」となると、今はできそうもないのですね。これまた不思議ですね。今は学生に1冊のテキストを指定して、これしようとしても、「先生このテキスト買うんですか、買わなきゃいけないんですか。」って返ってきます。途端にガクンときて、29冊も無理だなとなっちゃいますけど。そういうようなことで今、四苦八苦しているところです。

当時の学生さんたちは、いろいろ勉強しました。学部生と同じように大学院生を指導すると、院生は大変勉強しているのを見てきています。大学院の入学試験の面接のときに、「この人は大丈夫かな」と思うのですが、機会を与えて入れてみると、やっぱり諸々の課題をクリアしていくのですね。その力、成長力というのは大変すごいものがあるなというように感じます。

それで私は東洋大学の「東洋大学らしさ」というものは、司会の森田先生から「鼎談では東洋大学らしさを示して下さい」ということを言われましたので一言いうと、東洋大学の大学院らしさというのは、「機会の提供」だと思っています。機会の提供というのは、できるだけ間口を広げて、そこに入ってこようとして、そこからキャリアアップしていこうとする人をできるだけ掬い上げていくこと、それが「機会の提供」につながるのだと思っています。

しかし、それは「結果の平等」ということにはならないということです。大学院に入った人、全員が博士号の学位を取って出られるかという、

やはりそうではない。それは努力するかしないかということで、その結果は一人ひとりに課せられていることだと思っています。従って、入ったからにはその機会を大事にさせていただいて、自分自身のキャリアプランに沿って目的どおりに初志貫徹するようにしていけば、先生方はもちろんいろいろ支援してくださると思いますので、それでいけると思います。

しかしながらやっぱり、権利の上に眠っている方もいるわけです。特にもう職を持っていたりとか、職を持っている方はやはり後がありますから、だからこれをやらなくても大丈夫、生きていけるとなると、人間はどうしても易きに流れる傾向があります。そこが大変面はゆいところですね。能力を捨てているなど。仕事は大変忙しいだろうが、でもやっぱり眠るのを削ってでも、何とかしてでもやってくれないのかなと思って、こっちはやきもきしています。

ご本人たちはあんまりやきもきしていませんね。連絡もあまりないし、こちらもせっつくこともしません。出席もあまりしなくなると、知らず知らずのうちに期間は過ぎていくわけです。そのうち時間切れになってしまいます。だからこれは非常にもったいないことだと思っています。キャリアアップを目指す機会を得た方は、できる限り初志貫徹して、トライしてやっていただければありがたいなと思っています。

昔はゼミ合宿とか、大学院とか主導で古川先生たちも一緒に、院生たちと一緒にしたことがあります。あの頃、日夜議論を戦わせました。そうしてその議論を戦わす場がやはり大規模化してくるに従って少なくなってきたという印象を持ちます。できる限り、中間報告会等の発表の場を活用した活発な議論展開をしていけばよいと思います。やはりお互い東洋大学大学院で学んだというのは一つの共有財産ですので、この財産を大事にさせていただいて、切磋琢磨して、傷口をなめ合うだけの関係にならないようにすることが大事だと思います。

やはり切磋琢磨し合う、そういう議論展開って大事だと思います。そのベースにはみんな一緒だよ、みんな一緒の学友だよというベースの上に、

一人一人がを伸びていくが必要になる。それには何が大事かという、「他流試合」だと思います。やはり学内の中でだけ関係を作っている「井の中の蛙、大海を知らず」ですので、やはりできるだけ外へ出ていき、さらには研究センターとか、いろんな研究グループもできていますので、そういった所へ入り込みながら、さらには外へ向かって外の研究会にも入って行って、学会等でも東洋大学の院生の実力をぜひ高めていただければと思います。

幸い、社会福祉学会誌等の学術研究誌を見ていると、学会誌に査読付きで載る東洋大学の院生が増えています。大変ありがたい傾向だなと思っています。どんどん東洋大学社会福祉学専攻という所属で載っていますので、心強い限りです。ぜひ皆さんがたも競って掲載に挑戦して頂ければ有り難いです。

森田：はい、ありがとうございました。佐藤先生がちょうど勉強なさった時期、あるいは天野先生がいらっしゃった時期、この時期は社会福祉のちょうど方法論と政策論みたいな形で、教員も6、7名のところで具体的には半分ずつぐらいのところですね。あまり今のようなチームで指導体制に当たっていくみたいな形は取れなかった時代だったと思います。

そういう意味で東洋大学の研究っていうのが、あるいは研究と教育と言った方がいいのかもしれませんが、それが多分1990年代に入って佐藤先生や、あるいは古川先生が入ってくさる、ちょうどそこで3人ぐらい補充されてくるんですね。その時代にやはり東洋大学の教育や研究っていうのが一気に、多分総合化されていくという時代に入ってしまったんだと思います。

今お話を聞きながら、事例研究の重要性、あるいは現場で学ぶということの重要性、と同時にいわゆる先行研究や、あるいは文献をきちんと読むということの重要性、こういったものを社会学の領域のほうから学ぶという。社会福祉の中に足りなかったっていうのがどんなふうに補われながら、ちょうどすぐ社会福祉の大学院教育、特に後期の教育が始まっていく過程の中で、先生方がご尽力

くださったかということが分かりました。

ちょうど今、私は学部長の任を負いながら、佐藤先生のお話聞きながら、先日もやはり、今学部教育の中ではある意味で間違っ入っちゃったみたいな、本当は何年も浪人してもうちょっと上の大学を狙ってたんだけど間違っ入っちゃったみたいな、そういった学生っていうのは、もう今やほとんど学部には居ないということをよく言われるようになってきました。

そういう意味では東洋大学というのは二部教育があったり、あるいは大学院教育の中でそういった多様な人たちを受け入れるっていう要素がある中で、人材を輩出してきたのかなということも一方では思って聞いておりました。

それでは古川先生、その中で多様な人材を輩出するために、毎年のように私も下仕事をさせていただきましたけども、何せ私、一番年下ですからね。その辺りことをぜひお話しただいて、東洋大学の研究と教育、ここの特筆すべきことは一体何なのかですね。そして後に続く者たちが東洋大学で学ぶということの中で、ぜひ守っておかなければならないものって何なのか、ぜひご教授いただければと思います。

古川：なんか、難しいこと言うね。そんなことは答えられないな。話を聞きながら東洋大学に歴史有り。小冊子にも入るかな。そういえば東洋大学っていうのは昔から社会事業科から始まって、今の日本で東洋大学と日本女子大学と、もう一つどこだっけ。

森田：大正大学。

古川：大正大学か。関西は同志社大学か。そのあたりが日本の大学レベルでの社会福祉研究の始まりなんですね。

大正10年代はアメリカのメアリー・リッチモンドが『社会診断』という本を書いた時代です。その『社会診断』という本を日本で最初に使ったのは、東京大学の哲学科の社会学専攻です。社会学のテキストとして使っているんですね。何ていう先生だったかちょっと忘れましたが。つまりその

当時、社会全体をトータルで捉えて分析した本がなかったんですね。今は社会学もえらく発展していますが、アメリカの社会学の淵源の一つは、社会科学協会です。19世紀の終わり頃に創られるんですけども、これはセツルメントをやっている人、慈善事業をやっている人とか、そういう広い意味での社会問題に関心を持つ人たちが、その問題を科学的に研究するために組織したサークルです。その社会科学協会の中から一方で理論志向の社会学が形成をされますし、実践的な課題に興味を持ち続けた人がソーシャルワークの大学院教育を作るといって、そういう経緯があります。その後、社会学のほうも理論派と実践派に分かれてみたり、つながったりしてはいますが、社会福祉、ソーシャルワークのほうも理論派と実践派に分かれるというようなことがありました。研究史を眺めていくといろいろなことがあったわけです。これからもそういうことがしばしば起こるだろうと思いますね。そういうことを繰り返しながら新しい時代が作られていくんだろうなと思っています。皆さんがたにも、そのような流れの中のどこかに一枚加わって貰いたい、加わるが必要じゃないかなと思います。

それはそれとして、先ほど森田先生が昔の東洋大学では大変なバトルが行われていたという話をしていました。昔のことですが、孝橋正一さんという京都の大先生がおりまして、この人が東洋大学にも何年かおられました。私も非常勤講師の控室で一度お会いしたことがあります。それから先ほどの佐藤先生の恩師の田村先生です。そんなことで、孝橋派と田村派がバトルをしていて新入生を迎える時期には教室から出てきた学生を捕まえてどっちのグループに入れる奪い合いをした時期があるそうです。文字どおりのバトルだったようです。最終的にはどっちが勝ったかということではなく、だんだんお互いにくたびれてきたと思うんだけどね。それでも、僕が東洋にきた自分にもその名残があるような雰囲気でしたね。

東洋大学にはそういう時期もありました。しかし、そのことがあってということもあるのかもしれないけれども、政策論派と技術論派とが、その両方がそれぞれを取り込むような社会福祉の研

究を思考することになります。結果的には、そういうかたちにだんだん収斂していったところがありますね。そういう意味では日本の社会福祉研究の、ある種正統派的な部分を受け継いでいるところがあるのかな。私はそう思ったりするんです。

ただし、私はある時期のことですが、南アメリカ大陸の沖合、太平洋側にガラパゴス島というのがありますな。私の研究の仕方はそのガラパゴス島のであるという趣旨のことをどこかで書かれたことがあって、そうかなあ、と思ったりしました。日本の携帯はお財布機能が付いたりして新しいけれども、世界的にいうと取り残されてしまっている。ガラパゴス的になっているわけです。私の研究はマイナーもいいところだというわけです。時代からとり残されていく運命だというわけです。

社会福祉の研究は、ソーシャルポリシーかソーシャルワークか、そのどちらかに領域を決めてしっかりやるべきじゃないかという趣旨の批判がありました。それにたいして、私はその両方が必要だよということをとときどき書いたりしておりました。そこで、お前はヨーロッパやアメリカの研究動向からいうと極めて異端的な存在である。そういうふうに言われたことがあるんですね。

私は異端であってもいいのではないかなと思っていまして、アメリカにもイギリスにも両方に軸足を置いてやっている研究者だっているんですね。数はそう多くはないですけど。そういうことを考えると、それぞれの研究の領域や枠組みは、自分できちんと作っていけばいいわけで、ひょっとするとガラパゴスの陸ガメみたいなかたちでしか存在し得ないことになるのかもしれませんが、しかし、あまりそういうことは気にしないでやっていくというのが東洋大学らしくていいのかもしれませんがね。

東洋大学にはあまりカミソリ派はいないんですね。教授の中にはひょっとすると居るかもしれませんが、私が接した学生諸君、院生諸君はカミソリ派というよりどっちかという、あまり切れはよくない。だけれども何とかして切れ味を身に付けなきゃという努力していることは間違いない。意外とそのうち切れるようになるんですね。

やっぱりさっきの佐藤さんのお話とつながりを

つけるようなかたちで言うと、伸び代はちゃんとあるわけです。ただ、自分の持っている力をどういうふうに磨いて伸ばしていったらいいのかということについて、必ずしもご本人たちは気が付いていないということがあるので、そういう人たちに自分が持っている力に気付いてもらうような、そういう研究の指導ができればいいという校風、学風になってきたのではないかなと思うんですね。結果的に、ですけれども。

個人的には教室で一緒に勉強しているときよりも、教室が終わってから飲み屋に行ってわいわい学生諸君、院生諸君と酒を飲んでいたときに、独りよがりかもしれませんが、意外といい教育の仕方をしてきたんじゃないかと思います。別に酒屋に行かなくてもいいんですが、先ほどの話の続きだけど、お互いがいろんなことについていろんな議論の仕方をする、そういう機会をきちんと作っていかないといけないということです。

私は今、ふと東洋に来た時のことを思い出しました。今は近代的なビルがたくさん建ち並んでいますけれども、私が東洋に来たときには木造の建物だらけでした。そこに、佐藤さんと池田由子という児童虐待の専門家と3人で来たんです。しかも、私なんか前にいた大学で「辞めるぞ」と言って次の後任も決まりかけているのに、ある日突然山下先生から連絡があり、「採用することはできませんけど1年待ってください」と言われる。驚きましたね。「そんなこと言っただけで後任が決まっている」と言ってごねたわけです。そうしたら、渋々受け入れることが決まったようです。それで、1人だけというわけにはいかないので佐藤先生も池田先生も一緒に採用されたそうです。いよいよ着任して研究室に行きました。木造の建物の1階で、隣がトイレだった。池田先生と2人で一部屋だったんですけど、学問の匂いよりも別の臭いがする。正直えらいところに来てしまったなと思いました。まあそういう時代だったんですね。私が東洋に来たのが91年ですけれども、それから20数年が流れた、今ではビルだらけのキャンパスになりました。特にこのビルは私が辞めてからできたもので、どこへ行ったらいいのか分からない。大変なビルが建ちましたね。

さきほど、私が学部やら大学院やらいろんなものを創ってきたという話がありました。東洋大学は伝統もあるし、カミソリ派はあんまりいないけれども、きちんと研究をしてそれなりの業績を挙げている人たちが沢山おられる。しかし、外側から見るとなんか養老院みたいにみえる。先ほどの社会学の先生たちもそうだけれども、皆さん、国立大学で一仕事終わってきた人たちです。そういう人たちがたくさんおられる。その人たちがいろいろないい教育をしてきたことも事実ですけども、やっぱり学生のほうから見ると孫と祖父母の関係みたいな状況がずっと続いていたというわけです。

やはりこれはちょっとまずいというわけです。社会福祉の領域でも先ほどの孝橋先生もそうだし、吉澤英子先生もそうだし、それから障害者問題を担当していた菅野重道先生。いずれもその道の研究史をたどると名前が登場する人たちがばかりだったんです。しかし、なかなかそれだけでは人は育たない。やっぱり若い研究者をきちんと入れて、その人たちが中心になるような状況にしていけないといけない。そうしないとなかなか難しい。

われわれの採用についても多少そういう期待もあったらと思う。その後はできるだけ功成り名遂げた先生にある期間就任をお願いするというのではなく、若い先生に来ていただいて、じっくり取り組んでいただく必要があるんじゃないかと考えました。大友信勝先生とか、秋元美世先生もそうだし、その他いちいち名前を挙げませんが、今もう中堅、中堅というか大家に近いかもしれないけど、そういうかたがたを沢山受け入れ、そのかたがたに中心になってもらうことにしました。

やっぱり学生が伸びるためには教員が伸びないと駄目なんですね。一番いいのは学生より少し年上の教員が一生懸命頑張っている、その姿を見せることです。それが学生を奮い立たせる最大の、そして最良の方法だと思います。功成り名を遂げ、退職後に着任して貰うような先生、そういう教員も一方では必要なんです。しかし、とにかく何とかしなきゃといって自分で研究を積み重ねている先生たちがいるということが、やっぱり研究の進め方にせよ研究への取り組み方にせよ、学生や院生の教育で非常に大きな成果をもたらしてくれる

のではないかと、そう思いました。

もう一つは東洋の中で社会福祉学科、社会福祉学専攻のプレゼンスを高めていかないとどうにもならないということがありました。率直に言うと、社会学部の中に社会福祉学科があるというのは、社会学の中で社会福祉を研究してきた東洋の伝統であり、特色だというふうにも言えるわけです。しかし、別の面から言うと、社会福祉学は社会学の垂流的な応用領域のように見えるわけです。社会学の連中からもそう言われるし、自分たちもそういう意見を持つてしまうようなことがあるわけです。

そういう状況ではなくて、社会学の方向性を見極めながらも、社会学部を構成する学科の一つとして対等な、イコールフィッティングの立場で議論ができるような状況を作っていくのが大きな課題だと考えました。それから東洋大学、今は11学部あるのかな。他の学部との関係において対等で渡り合っていけるような、そういう発言ができるようにしていけないといけない。大学院についてもそうです。

窪田先生が社会学研究科の委員長を務めておられた時期に日本でも最初の夜間大学院として福祉社会システム専攻を設置したのですが、先生には大変なご苦勞をお掛けしたようです。窪田先生は社会学研究科の委員長として、それこそ日本を代表するような研究者たちが集まっている大学院委員会へ出掛けて行って推進していただきました。ご本人が、女の私が行ったら私をどういうふうに扱ったらいいいのかおじさんたち困っていたわよ、とおっしゃっていましたがね。確かに、他のメンバーは困っただろうと思います。しかも社会福祉という訳の分からない研究領域の研究者ですから。

もちろん、窪田先生はそのような状況の中で発言する、きちんと発言して存在感を発揮し、新しい専攻の設置を実現して下さいました。窪田先生には、東洋の中における社会福祉学のプレゼンスを高めるという、大きな仕事をしていただいたわけです。

福祉社会システム専攻は日本で初めての夜間大学院であり、定員を30として出発しましたが、初

年度は100を超えるほどの応募者が来たんですね。その後、だんだん類似の夜間の大学院できてきましたので応募者は減ってきています。今定員は20ですかね。もう少しは夜間大学院で勉強しようという人が増えるといいなと思っています。

始めの頃福祉社会システムには医療関係者、なかでも看護師さんたちがたくさん入学してきました。彼女たちは看護師として働きながら経済とか経営とか、法律とかそういうところで学士号を取ってから入学してきたひとたちで、夜間大学院で修士号を取りました。彼女たちは修了後どこへ行ったかという、ほとんどの人がその頃から急速に設置される看護大学の教員として就職していきました。そういうことが社会福祉学、東洋の社会福祉学のプレゼンス、存在感を高めることに役立ったのではないかと思います。

もう一つの仕事は、朝霞のライフデザイン学部の設置です。ライフデザイン学部には生活支援学科を設けました。社会福祉は社会福祉としてきちんとした足場を作り、発展を期さなければならぬ。それが基本です。しかし、実際に仕事をしようと思うと社会福祉だけでは何もできないわけです。周辺のいろんな施策やそれを担う専門職とうまくやっていかないといけない。連携し、協働していかなければならない。われわれは社会福祉を足掛かり、手掛かりにして来ましたが、連携や協働が求められる新しい状況の中で社会福祉を軸に全体を包括し、制御して研究したり実践したりしていけるような、そういう研究の領域、教育の領域を創造する必要があるんじゃないか。そういう思いで生活支援学科を構想し、あわせて健康スポーツ学科と人間環境デザイン学科を設置しました。1年後には、ヒューマンデザイン学専攻という大学院も設置しました。

新しい領域をできるだけ学際的に追究する、その方向性は間違っていないと思います。しかし、実際にそれを研究の面、教育の面、実践の面で着実に、確実に成果を挙げるということは簡単ではない。非常に難しいということを痛感しております。なかなか見栄えのいい研究や教育の成果をあげるのには容易ではないわけです。だけれども、それではやめようということではありません。学問も教

育も、時代を超えて新しい方向性とそれを支える方法論を探っていかなければ、全体としての発展がないわけです。自分の出発点を見失わないようにしながら、できるだけ幅を広げ、遠くまで見通してというスタンスを維持することは容易ではありませんが、それだけ重要な課題ではないかと思います。

東洋大学では、社会福祉学のプレゼンスを高めることを考え、微力ではありましたが、社会福祉学科、社会福祉学専攻、福祉社会システム専攻の基礎づくり作業に参加し、社会福祉の発展形態としてのライフデザイン学部の設置にも参画してきました。皆さん方には、次なるステージに飛躍をしていただけるとありがたいと思っていますところ です。

森田：ありがとうございました。

せっかくなので、お二人ぐらい、もしここで質問とかあればお願いをしたいというふうに思っていますが、いかがでしょうか。

今、古川先生から社会福祉というものの奥行き の広さというんでしょうか、ちょうど今、社会福祉学科と生活支援学科というのが二つの学部にまたがってある状況の中で、そして大学院は今、福祉社会デザイン研究科という形で、ある種一体化しているわけなんですけども、そういう中でこの21世紀の国に少子高齢化が一層進む中での社会福祉の教育、あるいは研究というものを展開しなければならぬ。

私はいつも思うんですが、早過ぎてもいけないし、恐らく遅れたら最悪だしっていう、この辺が非常に時代を見る目、あるいは時代を読むというのか、その辺りがとても重要なんだろうというふうに思うんですが。いかがですか。なんか、ぜひここは聞いておきたいと思われることはありますか。いかがですか。

古川：早過ぎたんですかね。そんなことはないと思います。近年、例えば非正規の失業者対策を皮切りに、サービスの在り方としてワンストップサービスじゃなきゃいけないとか、多分野横断的なアプローチの仕方をしなきゃいけないとか、介護は

地域包括サービスでなきゃいけないとか言われていますね。保健師、栄養士、その他もろもろの関連領域の専門家たちと一緒にやってかなきゃいけないとかということが言われています。今やそういう時代になっています。確かに、ある意味では若干早く言い始めたというところがあるのかもしれないけども、今や一番の旬だと思うんです。

ただそれを研究として、教育として、中身のあつものを作っていくという、そのことが追いついてないということです。そのことは私個人の研究や教育についての反省ですが、皆さん方にはそのところを是非克服していただきたいと思います。

森田：いかがですか。ないですか。なければこの第1の鼎談ということのをこれで終了したいというふうに思うので、一言ずつ、多分天野先生もずっと言いたいことがあったらと思うので、一言です、先生。いっぱい話しちゃいけないので、一言ずつ、もう話し始めたら1時間くらい話とかすると思うので、一言ずつお願いしたいと思います。

天野：私、今宇都宮短期大学という所で働いております。それでだんだんと学生さんが来ないんですよ。高等学校で社会福祉といってもなかなか教員が分かってくれない。で、社会福祉がどんどん減ってるってことを危惧しています。

だからどうやったら、社会福祉という、社会福祉学でもどちらでも、社会福祉に関心を持つ学生さんがもっと、どうやって広がっていくのかなということを、今すごく、本当に考えてます。来てほしい。

森田：どうもありがとうございます。佐藤先生から。

佐藤：グローバルな視野をというふうなことです。考え方としてはグローバルに。しかし行動は足元から、ローカルにというふうなところ。これを併せ持つ、このグローバルにというのがとても大事だと思います。

ソーシャルワークでも、日々の皆さま方の研究のスタンスでも、足元だけを見ていたのでは狭くなりがちですね。それよりもやはり広い視野の中

で見ながら、その中で今自分が研究しているのはここだという位置付けをしっかり持つことですね。それがやはり国際的な変化の中で機能することにもなると思いますので、大事だと思います。

古川：私は今、西九州大学という所に勤務しています。森田先生に懲りもしないでと言われているような気がしますが、今新しい学部、学科、研究科の専攻とかいろいろ創ろうとしており、なかなか新たな発想を認めようとしめない文部科学省に苛立っております。従来、健康福祉学研究科っていう名称でやってきていたのが、それはもう古い、生活支援科学研究という名称に改めたいと主張しています。そのほうが生活支援のいろんな領域を組み込むかたちで新しい時代にふさわしい議論がやりやすいと考えています。それをどうやって認めてもらうかです。

専攻のレベルでは、従来の健康福祉専攻を4つ専攻に分け、その中の1つとして地域生活支援学専攻というのを設けたんです。一応来年4月からやれることになっていますけども、そこに後期課程を設置しようとしております。それについて、趣旨がよう分からん、そういうのを創って大丈夫なんですかという声があちこちから湧き上がってきているところです。まあ何とかなるかと思っています。

援助の方法として考えると佐藤先生の言うグローバルのローカルのほう、つまり地域社会をどうやって再生、発展させるかっていうことが重要になると思っています。そのことを前提にしなければ地域における生活支援って成り立たないんですよ。そういうことをいろいろと議論しているんですけども、なかなか難航しています。西九州大学としては初めての後期課程ですから、何とか実現させたいと思っています。なんかのときには応援していただきたいと思います。

森田：ほっとしております。何とか時間を少し過ぎるぐらいで、この3先生のお話を今日伺いながら、皆さん一人一人のこれから何らかの形でのごくメッセージを出していただけたんではないかというふうに思っています。

私自身実は1975年に東洋大学に入りました。大学院から入らせていただいて、それで先ほども出てきました孝橋正一先生に、私は大学院時代に出会ったときにこんなに明快な、私は経済学を勉強していたんですが、話、方向性を示していただけるっていうことに対してすごく感動しまして。

それで当時私が指導を受けていた一番ヶ瀬康子先生にご相談をしたら、東洋大学に行きなさいというふうに言われて、私は東洋大学に、大学院に来ました。そのときに私は試験のときに忘れられないことがあるんですね。孝橋先生が面接のときにおっしゃったんです。1975年の話です。そのときに「今の児童福祉の施設というのは今後もずっとこのままでいくんですか」っておっしゃったんですね。「あなたはそこで何を研究しようとしてるんですか」とこうおっしゃられて、これはずっと私の中に残っている課題でした。

で、ちょうど1980年のときに日本の社会福祉の、特に児童福祉の領域では、ある意味で児童福祉施設であった当時友人だとか児童養護施設が、地域支援に動き始めた時代がありました。そのときに孝橋先生がニタッと笑われて、「そろそろあなたの研究というのが見えてきましたか」とかっておっしゃられて、その後孝橋先生が京都に行かれたんですが、そんなことを思い出しておりました。

私はちょうど大学院生の頃に社会調査というのを、実習では一番ヶ瀬先生はちょうどそのとき支援の代表をしておられて、孝橋先生が相談の中核におられたサリドマイドの被害の子どもたちの所にずっと調査の、4単位のために2年間通いましたけれども、そういう授業でした。

ある意味で、今の言葉でいえば当事者に徹底して寄り添うということだっただろうと思うんですね。その徹底して寄り添うっていうことってというのはどういうことなのか、そこから社会福祉研究っていうものを作り上げていくっていうことを、私はそこで学んだ気がします。

私は東洋大学の大学院で学んだことっていうことを、いつもいろんな所でお話するときに感じるのは、東洋大学が好きっていう、そういうふうにいつでも言える立ち位置で居たいなというふうに思っているんですね。卒業生の皆さんにとって

も、今も東洋大学好きだな、あるいは自分か育ったときと比べていろいろ変わったけれども、今の東洋大学好きだと言って言えるような、そういう大学でありたいというふうに思っております。

今3万人近く居る大学に膨れ上がっておりますので、なかなかそれを実行するっていうのは難しくて、多分皆さんからするとこの8号館っていう巨大な建物の、もうちょっと何かあってもいいんじゃないのとかって思われる部分っていうのはあると思いますけれども、それでも私はやっぱりこの自由な、自由闊達な東洋大学の中における教育だとか研究というものが土台にあり、そしてその中で新しい課題を徹底して当事者の方たちに寄り添いながら作り上げていくっていう、東洋大学流の切り開いていく社会福祉の研究の在り方っていうのものを、ぜひ次に踏襲しながら新しい東洋大学の歴史、皆さんが何しろこれから作っていただく形になるというふうに思いますので、ぜひ今日この時間、暑い中おいでいただいた3人の先生方に感謝を申し上げながら、私たち自身がこの後何年間か、もう少し頑張ることをお伝えして、今日の感謝の意にしたいというふうに思っております。

本当に今日は先生方、古川先生は佐賀から、そして天野先生はこのすぐお近くですけども、いつも見守っていてくださってありがとうございます。佐藤先生、本当に今日はお忙しい中ありがとうございます。じゃあ皆さんで感謝の拍手で。ありがとうございます。

進行係：森田先生、先生方、ありがとうございます。本当に東洋大学における社会福祉学教育・研究の歴史と伝統を引き継ぎながら頑張っていかなきゃいけないということを、思いを新たにした次第でございます。今回のこの記念鼎談にしましては、来年の紀要のほうにテープ起こしという形で起こさせていただきますので、また先生方には人の名前なんか間違えちゃいけないところだと思いますので、ご協力いただければと思います。

それでは10分ほど休憩させていただきます、4時から記念鼎談の2を開始させていただきますと思います。